過剰適応傾向者に対する葛藤場面彩色法が 対人ストレス表出に与える影響

○鈴木俊太郎¹・小川文²

(1 信州大学・2 信州大学大学院教育学研究科)

キーワード：過剰適応傾向，彩色，対人ストレス表出

Influence of Conflict Coloring Method on Interpersonal Stress with Over-adaptation People

Shuntaro SUZUKI¹, Fumi OGAWA²

(1 Shinshu Univ., 2 Graduate School of education, Shinshu Univ.)

Key Words: over-adaptation, coloring, interpersonal stress

目 的

過剰適応傾向の高い子どもは，一般に主張性が弱く，自分の葛藤を外に向かって表現することが少ない(桑山，2003)。また，エゴグラムのACが高い状態は，感情の抑圧や，それに伴う慢性的な陰性感情の蓄積といった特徴を表すとされている(高橋・奥瀬・八代・佐藤・岩淵，1997)。従って，心理的な支援のニーズが高いにも関わらず，カウンセラーに対して自分の感情を抑圧してしまうことが予想される。

このような過剰適応傾向者の感情表出を促進する面接ツールとして葛藤場面彩色法の開発を行った。葛藤場面彩色法とはP-Fスタディを原案とし，葛藤場面を描いた図版の吹出に彩色をすることで対人ストレスの表出を促進する技法である(小川・鈴木，2013)本研究では，過剰適応傾向者に対する葛藤場面彩色法の効果について検証を行う。

方 法

実験参加者 大学生・大学院生 61名(過剰適応傾向高群 31名(男性 15 人，女性 16 人)，低群 30 名(男性 13 人，女性 17 人))を対象とした。平均年齢は 22.3 歳($SD=1.94$)であった。

材料 映像(10 分間のグループ討論)，クレヨン，色鉛筆，図版，塗り絵(吹き出し)，質問紙(映像を見て感じた事についての自由記述)

手続き 初めに映像を視聴し，次に実験操作(図版の吹出に彩色，図版の吹出にセリフを書く，吹出単体に彩色，統制のいずれか 1 つ)を行い，終了後質問紙に回答を求めた。

結 果

1. 分析 I：独立変数を実験操作条件(図版の吹出に彩色する群，図版の吹出にセリフを書く群，吹出単体に彩色をする群，統制群)と対人ストレス表出の有無の 2 水準，従属変数を文の数とし， χ^2 乗検定を行った。また，実験参加者のうち過剰適応傾向高群のみについて，同様の分析を行った。結果，文の数の偏りは有意であった(全参加者： $\chi^2(3)=13.97$ ， $p<.01$ ，過剰適応高群： $\chi^2(3)=11.52$ ， $p<.01$)。結果は表に示した通りである。

表 実験操作とストレス表出の関連

ストレス/群	図版彩色	図版セリフ	吹出彩色	統制
表出	+ *	—	—	— * *
非表出	— *	—	—	+ * *

2. 分析 II：対人ストレス表出文について，独立変数を否定的対人感情の種類(嫌悪，違和感，劣位，脅威)，従属変数を文の数として χ^2 乗検定を行った。また，実験参加者のうち過剰適応傾向高群のみについて，同様の分析を行った。結果，文の数の偏りは有意であった(全参加者： $\chi^2(3)=66.43$ ， $p<.01$ ，過剰適応高群： $\chi^2(3)=30.96$ ， $p<.01$)。ライアンの多重比較を行ったところ，全参加者・過剰適応高群の両方で「脅威」の出現率が他の否定的対人感情の出現率と比較して有意に低く，全参加者のみにおいて「嫌悪」の出現率が「劣位」と比較して有意に高かった($p<.05$)。

考 察

全実験参加者・過剰適応高群のみの両分析において，他の群では効果が見られなかったことから，葛藤場面彩色法によって対人ストレス表出が促進されるという仮説は支持されたと言える。また，表出された否定的対人感情の種類ではどちらの分析でも「脅威」の表出が少なかったが，これは実験材料の映像から疎外感を感じられるものの，真に自分が排除される状況を想像できるまでの強いネガティブ経験ではなかったことを反映していると推察される。

参考文献

- 桑山久仁子(2003)．外界への過剰適応に関する一考察—欲求不満場面における感情表現の仕方を手がかりにして—
京都大学大学院教育学研究科紀要，49，481-493。
小川文・鈴木俊太郎(2013)．対人ストレス表出促進のための描画法の開発東北心理学会 16。
高橋恵子・奥瀬哲・八代信義・佐藤豪・岩淵次郎(1997)．心身症患者のエゴグラムによる心理特徴の検討 旭川医科大学紀要，18，11-26。